

「百号の額」 石川 寿夫

初雀障子に躍る枝移り

峰の風掬つて被る夏帽子

穢れなき地球の蒼さなづな粥

吹かれつつ鶴翼の陣あめんぼう

針供養えくぼの古希の糸切歯

ひぐらしの音色や翅のうすみどり

白梅の風を巻き込む綿菓子機

夜の底を金の淨土に湖の月

朝茜揺らして濯ぐしじみ採

川風のジャズへ転調秋ざくら

波を切り望郷を斬る残り鴨

きぬかつぎ笑顔のつなぐ里言葉

天平の鳴尾跳ねる空花吹雪

蒼穹を平らたひらに赤とんぼ

万象へ合掌しばし羽化の蝶

棟上げの響きは亩へ柿の里

新樹光鯉の水輪の幾重にも

山門は百号の額照紅葉

駆けて来よ魁夷の白馬青葉沼

蔓引けば夕日の雲からす瓜

手囲ひの蛍を渡す手の呼吸

平安の雅びを野辺に実むらさき

万緑に映ゆる落款朱のサイロ

銀杏散り止まず第九最終章

かわせみの降下の枝の指定席

頸あげて羽子板市を蟹歩き

太陽の香る土塊トマト抜く

相討ちも自刃も沼の枯はちす

藻の位置を決めて金魚の遊歩道

茅葺きの雪解しづくの三拍子